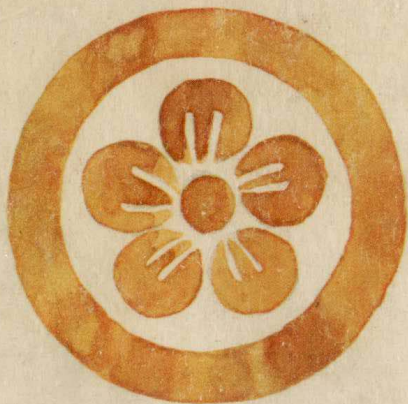
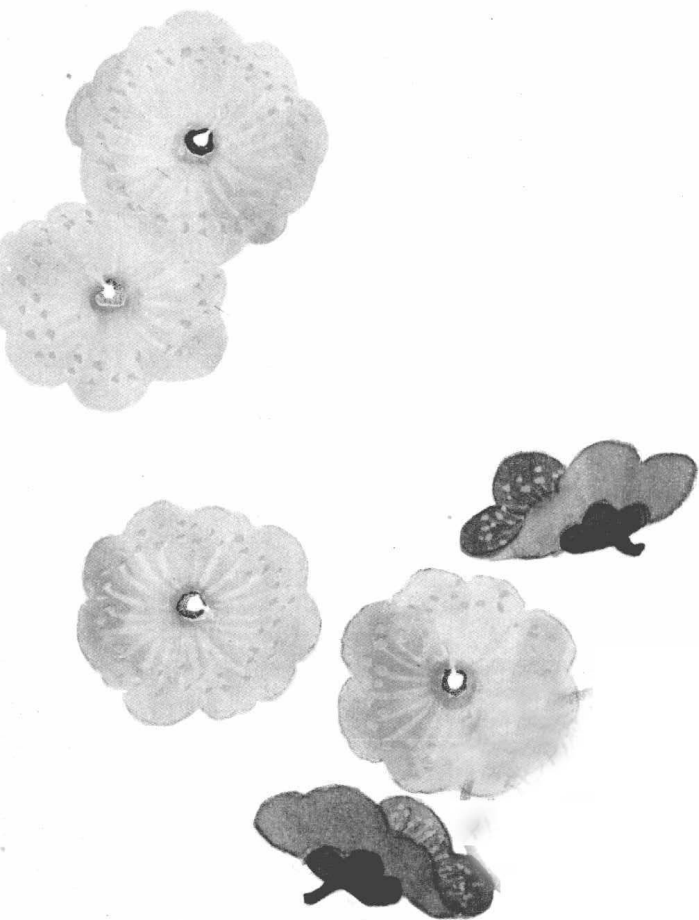


新吾番外勝負



新吾番外勝負

川口松太郎



新潮社版



新吾番外勝負

昭和三十七年九月二十一日 印刷
昭和三十七年九月二十五日 発行

定価二七〇円

著 者 川 口 松 太 郎

発 行 者 佐 藤 亮 一

東京都新宿区矢来町七一

発 行 所 株式会社 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(三〇)代表七一―九
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替え致します。

目次

復 讐 劍……………五

義 人 劍……………九四

殘 心 劍……………一五五

挿 装
絵 幀
岩 江
田 崎
専 孝
太 孝
郎 坪

新吾番外勝負



復讐 剣

落葉の道を駆け下る新吾の胸は、三人の弟子の三つの悲願をたたんでいた。が、どの一つにもそれぞれの困難をひそめている。手初めは甲州の甲府だったが、山伝いの險阻を避け、秩父の町は顔をかくしてそっと通った。秩父の山を去ると聞けば彼を慕う町民たちがどれほど悲しむか判らない。横瀬川添いに裏道を抜け、再び赤壁の名勝地、宝登山神社の参道へ出ると、馬の手入れを頼んだ茶店は、秋色見物の客を集めて人の姿が動いている。笠を深くして今日も又、参道へ入った。宿敵一真を討ち取った神前で、劍祖の日本武尊に感謝したい。一真を切ったのは彼の運命の一大転期、美濃の加納の失敗も、吹上げの御前試合も、六平太たち三人の命も、新吾が半生の運定めだ。玉の泉に汚れを清め、森閑たる拜殿に立ち

「神助を得て劍敵を討ち果し得ましたが、自分にはまだ数知れぬ敵があり、次の相手を見つけて諸国をさまよいます。劍技精進を怠らざる限りは御加護をお垂れ下さいまし」

と、声を出していった。

「劍技精進を怠らざる限りは！」

と、彼の祈りは努力を誓う。精進を誓ってのちに神助を垂れ給えと祈るのだが、神仏をたのまざる彼も神前に立つ瞬間は心が澄んで邪智が消える。何処か一カ所には一真の冥福めいふくを祈る仏心もあった。

生涯の劍敵とはいえ、彼もまた一流の武者、無念に死んだ哀れを思えば心も痛む。やがては同じ運命に終るであろうし、劍の下に生きる者の労わりを感じつつ柏手を打って拝殿を離れた。今日もまた人影はなく、一真を切った日には雑木林も裸だったが、今は紅葉が色鮮かに、玉の泉のこぼれ水は大燈籠の前を流れる。

ふっと足を止めた。あの日のあの時と同じように。

あたりに人影はないのだが、人の気配が感じられるの

だ。足を止めて身構えると、体は動かさずに目だけで見た。誰かがいる。

確かにいる。

陰から自分を狙っている。

足音もなく人影も見えずして、やがて

「新吾先生！」

と、呼びかける声が弱い。振り向きながら

「何者？」

と、八方を見た。それでもまだ姿は見えず

「わたくしに旅のお供をお許し下さいませうか」

「旅の供を？」

「はい。お許しを頂かぬうちはお目にかかれませぬ」

「貴公の名は？」

「お供を、旅のお供を！」

と、声が燈籠の陰なのだ。一真のひそんだ燈籠に、別な人物が新吾を見ている。

「お姿をお見せ下さい」

新吾もようやく微笑した。声で相手が判ったのだ。

「お供をお許し下さるでしょうか」

「許しませんよ一伝齋先生！」

と、燈籠の陰を見ながらいった。こぼれ水の細流の岸に一伝齋が立っているのだ。

「お許し下さらぬのならお目にはかかりませぬ」

「今になって何をおっしゃる。貴方は飛驒五郎、自分は秩父四郎、剣道兄弟の盟約をお忘れか」

「盟約の誓いをたてながら貴方に刀をつけたのです」

「それも卑怯な別当の策だ」

燈籠のうしろの影が動いて、笠に面を包みながらしおしおと近づく。千石の祿に目がくらんで、恩人新吾を裏切った過ちが恥しく、道場再建には職人に打ちまじり、完成すれば即日山を去ってしまった。

「どうして此処へ来る新吾が判ったのです」

「山外にあってお姿を見守っていた。長くは山にとどまる筈がないと思って」

「とどまらざる自分が判りましたか」

「道を求むる者は一所安住が出来ない。自分も曾つては一道場の主であったが、諸国修業の旅をおぼえ、流浪の道に溺れてからは一所にとどまり得られませぬ。恐らくは生涯をかける放浪剣士、どれほど立派な道場を持っても求道旅心は棄てられますまい」

何時の間にか参道の石畳を歩き出していた。大恩人を裏切った謝罪に、下僕となって臣節を取りたいというのだが、むしろ新吾は承知しない。

「願望の筋があつて山を出しましたが、一伝齋先生が御同行下さればこれにすぐる安心はない。が、飽くまでも兄弟剣士のお約束をお守り下されば」

「あの日の無礼をお忘れ下さるか」

「もうとくに忘れていゝのです。剣士は過去を見ず、この一瞬に死力をつくして足るのです」

と、淡淡として残心なし、よい道づれを喜びつつ長瀬の秋色を眺めながら

「先ず何処へいらっしゃる？」

「甲府城下へ出て船越十蔵のかたき最賀彦十郎を求めます」

「道はどれをお取りなさる」

「大菩薩を越えたいのです」

と、思い出の吾野から飯能を廻り、小曾木から氷川を経、大菩薩峠を越えて甲府盆地へ下ると甲府城はもう目の前にある。柳沢家の転領以後は幕府の直轄地で勤番武士の支配どころ、支配頭は五千石内外の旗本で勤番侍はざっと二百人、小譜請組の小禄武士が選ばれて配属される。俗に山流しといって、甲府勤番はある意味の江戸追放者だ。過ちを犯したか悪事を働らいてお咎めを受けたか、江戸を追われた暴れ者の集合地帯、最賀彦十郎もその内の一人だ。

「最賀彦十郎は何をする武士ですか」

「いずれは甲府勤番の暴れ者と思う」

「それが、新吾先生の門生を切ったのですか」

「新吾はやめよう」

と、声を止めて四辺を見ながら

「自分も五郎と呼び捨てにいたすゆえ、四郎と呼んで頂きたい」

と、形を改めていったのは甲府城外の恵林寺だった。

此処には一代の名将武田信玄の墓があり、新吾は何よりも先ず信玄の遺霊に参りたかった。甲州人の信玄尊敬は他国人の予想以上で少年少女に至るまで「信玄公」とうやまつて呼ぶ。例祭日らしく境内はざわざわと雑踏していたが、参拝をすませて山門前へ出て来ると

「旦那」

見知らぬ町人が呼びかけた。一目で旅人と判るのであらう。

「ようこそ御参拝で、有難う存じます」

と、馴れ馴れしく近づき

「お土産に水晶を如何でしょうか」

と、懐へ手を入れながらきよろぎよろあたりを見廻している。

・「御覧なすって下さいまし。こんなに美しく磨き上げた

品はめったにごさいません。お土産にお持ち帰り下されば、奥方様がさぞお喜びなさいましょう」

と、取り出した水晶の玉を掌たなこころに乗せている。見せながらも不安そうに

「この水晶は公然には売る事の出来ない品で、水晶の産地でないが甲州人は持てないのです」

「それはなぜだ」

「御覧の通りの山国ですから成りものが少なく、他国から食料を買わなければなりません。その身代り品になりますので旦那のような旅のお方ならさし上げられます。お安くして置きますからどうぞお求め下さいまし」

「折角ながらこれより諸国をめぐる者、このような品を持ち歩く事は出来ぬ」

「どちらへお出でか知りませんがこんな小さなものですから、お邪魔にはなりません。どうぞお求め下すって」

いいかけてうしろを振り向くと

「あっ、いけねえ」

と、叫ぶが早いか紫の袋を、新吾に押しつけ、素早く

体を交しながら参詣人にまぎれ込んだ。手に残された紫袋、咄嗟かたじけなくに懷へしまい込むと、甲府城内の同心が二人の手先を引き連れて男のあとを追って行く。

「こりゃア一体何うした事だ。袋のままで預けて行つたが」

「領内の売買を禁じているのだから密売人であろう」

「禁制の目をかすめて旅人に売りつけるつもりか」

「何にしてもこれだけの水晶」

と、一伝齋も驚きながら

「こりゃア飛んだ儲けものだ」

「いや儲けものどころが大迷惑だ」

と、新吾は氣にして懷を押え

「重みで察するに十個の玉だ。諸国修行の武芸者には猫に小判、折角の名玉も役にはたたぬ」

「俺たちに売りつけようとするのがそもその目違い、商人の癖に氣のきかぬ奴だ」

と、笑いながら門前を去って甲府城下へ入ったが、非業に死んだ門弟の遺志、最賀彦十郎の名前だけで雲を撼くわ

むような探しものだ。甲府城下へ入って見ると、町中は何処となくさびれて活気がなく、至るところに空家があつて、立ち腐れに捨てられている。

「何とも侘^{わび}しい城下町だな」

「甲斐一国は徳川の天領、本来ならば豊かな筈だが」

「この様子ではロクな宿もあるまい」

寂れた町並を眺めながら、お城に近い三日町の、富士見屋という旅籠^{はたご}の前

「お泊りでございましょうか。お支度もとのえてございます。どうぞお入り下さいまし」

と、品のいい中年の客引き女だ。

「甲府では宿屋の客引きが女か」

「なかなか美しい。俺は此処が気に入った」

と、一伝斎はにこにこしながら

「富士見屋とあるが富士山が見えるのか」

「誠に申し訳ありませんが、お城の松が邪魔をいたしましてお山が見えませんが」

と、女もにつこり笑っている。

「富士が見えないのに富士見屋とはどういう訳だ」

「はい、女中たちの名前が残らずお富士となって居りますので」

「なに、女中は全部お富士だと」

「わたくしは一富士と申しますが、店の中で洗足^{すすぎ}の用意をして居りますのが二富士、お山は見えませんが、女中はみんなお富士ですから富士見屋で」

「まるで判じものだな。二富士の次は三富士に四富士か」

「主人と料理番を除く外は女ばかりで、八富士まで揃って居ります。どうぞ御覧下さいまし」

「どうだ四郎、富士山は見えぬが、女中たちの名前がお富士、女富士を見よとは面白い。此処へ泊ろう」

と、面白がった一伝斎が

「厄介^{ちがひ}になるぞ一富士さん」

「有難う存じます。お洗足は二富士がいたしますからどうぞお入りを」

新吾の四郎も苦笑しながらあとにつづく。次部屋のあ

る奥座敷へ通されると

「ようこそお泊り下さいました。有難う存じます。わたくしが三富士で」

と、茶を持って出たのは四十近い中婆さんだ。

「三富士は大分年を取っているな」

「いえわたくしはこれでもまだ若い方で、四富士は四十をすぎ、五富士は五十すぎ、六富士は六十でございます」

「頭かしらについている数は年をいうのか」

「はい、三富士までが三十代で四富士からは年の順になつて居ります」

「すると、八富士は八十か」

「いえ、六十から先に年はございませぬ」

と、宿帳をさし出して

「どうぞおつけ置き下さいまして、お風呂も沸いて居ります」

と、もてなしは行き届く。

「こいつは騙だまされたいらしいぞ。女中の富士見屋というか

ら、美しい女が揃っているのかと思うたら、一番若いのが三十で、あとは五六十の婆さんばかりだ」

「はっはっはっはっ女に無縁の武芸者が、色気を持つからこんな目に合うのだ」

「色気のある訳でもないが、同じことなら綺麗な女中の酌で一杯やりたいと思ったのに、こりゃ飛んだ婆ばばア富士だ」

と、苦笑しながら風呂を浴び、夕餉ゆうけの膳に向い合うと、山国の宿屋だけに岩魚いわなの煮びたしにどじょう汁、親切な老女中に、山の話を聞きながら旅の疲れを休めていると

「御免下さいまし」

と、障子を細めに

「最前是有難う存じました。御迷惑なものをお預け申しまして」

と、頭を下げながら部屋の内へすべり込んだのは、恵林寺で会った水晶商人あきんど、物腰も尋常で言葉つかいも丁寧だ。

「おお、これはよく来てくれた。こんなものを預けられて、迷惑千万だったが、よく此処が判ったな」

「へい御城内の同心に見つかりまして一度は逃げて居りましたが、どうせ今夜は甲府お泊りと見当をつけ、あとを追いかけてお宿を見届け、日の暮れるのを待つて居りました」

「そりゃアよかった。俺も迷惑をしていたところ、さアさア早く持つて帰ってくれ」

と、さし出す水晶の紫袋

「何ともお詫の申上げようがございません。何もいわずにお預り下さいましたお陰で、同心衆にもお咎めを受けず、命びろいをいたしました」

「水晶を売るとお咎めを受けるか」

「へい、こんな馬鹿な事はござんせん。柳沢様の時代には、水晶商人も沢山居りましたが、天領になりましてからは御城番の直支配で、わたくしどもの自由にはならなくなりました」

「食糧不足の代替品として他領へ売り渡す必要上ではないかし方もあるまい」

「いえそりゃアほんの申し訳なので、その実は城番下役

がうまい汁を吸い、甲府中の水晶商人は店を閉じ、食うに困つて他国へ流れたり、娘を遊女に売り飛ばしたり、それはもうさんざんな態たらく、わたくしにしたところ、旅のお方に抜け荷売りなぞをいたしたくはございませんが、こうでもしなければ生きては行かれませんが、不埒ふちな奴だと思召しでもございましょうが、どうかお許しなすつて。これで御免をこうむります」

と、水晶を受け取つて、恥しそうに出て行こうとする。

「待て待て」

と、一伝齋は

「それほどまでに苦勞するのは気の毒だ。折角のことゆえ一つ買ってやろう」

新吾は驚いて止めかけたが、一伝齋は微笑しながら

「諸国を巡る身の上には不必要な品だが、道中の魔除まよけに求めて置こう」

「それは誠に有難い事で、魔除けとはよい事をおっしゃ

って下さいました。かたき討ちに出る者は一つずつ持つて行くといわれるくらい、美しく透き通って居りますから、悪い奴が持つていては役に立ちませんもので」

と、善人そうな水晶屋が大喜びに喜んでいると

「自分たちは初めて甲府へ来たのだが、名高い城下でありながらひどく寂れて見えるではないか」

「へい、そりゃもう柳沢様の頃には、住民も一万五千人といわれて居りましたのに、天領になってからは家数にして六百戸、人数は一人以下に減ってしまいました」

「それは可怪しい話だな。天領民は他領と違い諸税免除の特典があり、住民は豊かに暮せる筈ではないか」

「それは百姓の多い土地の事で、年貢米は減免のお陰をこうむりますが、甲州は山ばかりで耕地面積が少なく、天領の恩恵に浴しません」

「それなのに柳沢時代にはどうして人が多く集った？」

「代代の御領主が名君で、織物を奨励したり、水晶細工がこんなに美しく出来るようになったり、山国の貧しさを救おうとして御苦労下さいました。それが天領地にな

ってしまつては江戸から御城番が御出役になるだけで、

御自分の領地を治めるのではなく、任期が来ればお役替になつて江戸へ歸つてしまふ人たち、領民の為めに苦勞する筈がありません。来たついでにうまい事をして、幾らか儲けて歸ろうという魂胆の者ばかりですよ」

「それが役人根性の悪いところだ」

「そこへ行くと柳沢様は御自分の領地で、私たちを可愛い領民とお思い下さり、みんなが少しでも仕合せになるようにといろいろな産業を工風しましたから、諸国から人も入り込み町も繁栄いたしましたが、大和の郡山へお国替になつたあとは、江戸から下つた判らず屋の馬鹿侍ばかりです」

よくよく腹が立つと見え、思わずあげる大声に、自分から驚いて首をすくめ

「こんな事を大声で申しましては、首が飛んでしまひましようけれど、旦那様方も町をお歩きになつて判る通り、建ち腐れてぺんぺん草の生えている家が沢山ございます」



「それを見て驚いたのだが、あれは天領地になってから逃げ出した家か」

「私もそのうちの一人で、柳沢様時代には、好い商いをさせて頂きましたが、御城番に変わってからは、たった五軒の御用商へ一手に扱わせ、三十軒もあった細工屋が残らずつぶれてしまいました」

恵林寺門前の密売男も、以前は歴然とした水晶商人、城番制度の悪政から閉鎖の憂き目に合わされているのだ。

「お前のような目に合っている者も多勢いる訳だな」

「はい、三十軒ありましたのが、五軒に減らされて、あとの二十五軒は商売替をしたり水晶磨きの職人を雇って、出来上った品物を御用商へ納めたりして居ります。が、昔は同じ仲間の男が、御城番に取り入って御用商になり、肩で風を切っているのを見ると、残念で堪らないのですが何時までもこんな事をしては居られませず、そのうちには頭を下げに行かなければならないとあきらめ